【師と出会う】

角田亘（国際医療福祉大学医学部　リハビリテーション医学教室　主任教授）

＊2018 年に某誌に発表したものを、一部改訂した。

出来たてホヤホヤかつ極めて小規模の講座（＊2018 年現在）ではあるのだが、私がひとつの医学部講座の主任教授の座に就くことができたのは、多くの先達に多大なるご指導を賜ってきたからである。初期研修医時代、レジデント時代、リハ科医師に転向した直後など、数多の先生方から医学臨床に関する貴重なアドバイスをいただき続けてきた。しかしながら、こと“医学研究”に限ると、国立循環器病センター（大阪府吹田市)でレジデント生活を送っていた時に出会った N 先生（いまだご存命なので、本名は伏せる）こそが、私にとっては唯一にして最大の師である。

N 先生は慶応医学部神経内科のご出身で、当時は同センターの脳血管内科部長という立場にあった。物静かな先生ではあったが、ぼそぼそと物腰低く語る言葉は必ずやいつも示唆にあふれており、同時に妥協を許さぬ厳しいものでもあった。当時は四十歳代後半であった N 先生と初めて会った時の私は、いまだ二十六歳の若僧であり、発表や研究などには全くご縁がなく、英語を話すこともままならなかった。そんな私に対して、なぜか N 先生は出会った当初から興味を示してくれ、発表だの分担執筆だのと様々なチャンスを私に与えてくれた。チャンスに飢えていた私は、自分なりにその都度全力を尽くしてお応えをしたつもりであったが、たとえば原稿を提出すると「少しだけ赤で直すつもりでしたが、終わってみれば黒がなくなってしまいました」との言葉とともに原型を全くとどめない真っ赤な原稿を返された。スライドを作成すると「もうちょっと面白くしてみましょう」と言われ、一緒に修正を始めると数時間後にはこれまた原型をとどめぬ代物となった。遅くまで私が院内に残っていると、午後九時過ぎに N 先生からのポケベルが鳴り「今からデータを整理しましょう」などと言われ、N 先生の部屋に行くとそのまま深夜二時くらいまで二人でパソコンの前に座ったりした。そして、そのパソコン作業の中休みなどに、私がいまも座右とするようなお言葉を教えていただいたりした。N 先生はアメリカ生活が長く、“当時の”奥様がアメリカ人であったこともあり、生きた英会話を N 先生ご夫婦から教えてもいただいた（夫婦喧嘩の仲裁を英語でさせられたこともあった)。しかしながら、医学研究に関して私が N 先生から最も強烈に教えていただいたこと、それは、“医学研究に携わる意義（なぜ、医学研究に身を注がなければならないのか）”、“医学研究の魅力と楽しさ（医学研究ができることが、いかに幸せなことであるか）”、“医学研究のために必要なセンス（これについては、私自身もいまだに十分には会得できていない）”の三つであったと思う。

当時 N 先生の許には、私以外にも複数人の弟子たちがいたのだが、彼らは皆、本邦の一流医大を卒業した、いわゆる“エリート医師”であった。しかしながら、彼らは皆一同にして N 先生の医学研究センスを「奇想天外」などと嘲笑して、N 先生の許を早々と離れていった。時が流れた今日この頃、そんな彼らは医学研究者としては明らかに失墜している。九州や四国の地方都市に追いやられた彼らは、過去の栄光にだけすがりながら哀れな日々を過ごしている。私自身が成功した研究者であるか否かはさておき、師となりうる先達が目の前にいることに気づかぬ人間に、幸福な未来が待っていることはありえない。

ただし、N 先生が聖人君子であったかというと、決してそうではない。「英雄、色を好む」という語を好んだ N 先生は、私が同センターを離れた後に若い女性と再婚して、私が結婚する際にも違和感あふれるスピーチで参列者のひんしゅくを買った。つまり私は、N 先生を人間として大好きであるとか、心から尊敬しているとか、そういう感じではない。それでもしかし、私はいまだに事あるごとに（たとえば研究計画を練る時、講演準備をする時など)、「N 先生ならば、なんと言うであろうか」「N 先生ならば、どうするであろうか」と自ずと考えてしまう。私が N 先生の許を離れてからは二十年以上が経過しているのだが、私はいまだに彼の幻影から逃れられない。これこそが、N 先生がいまだに私の師である証であろう。私は、このような師と出会うことができた幸運を、誰にとはなく感謝している。

一方で私は、私が N 先生に出会った頃の年齢、すなわち“なんらかの師となるべき時期”である四十歳代の後半を、慈恵医大リハ科で過ごした。そこでは、形のうえでは、確かに私が多くの若手医師を指導した。そして、今になって思えば、私が彼らに言った言葉や彼らに振舞った行いは、今で言うところのパワハラでありアカハラでもあったに違いない。しかしながら、私のパワハラとアカハラに耐えた彼らは、みんな若くして新進気鋭のリ

ハ医学者として確固たる道を歩み始めている。もはや彼らに謝罪をするべき立場にある私は、悪質なパワハラとアカハラに耐えた彼らには“無限の根性と打たれ強さ”が備わったものと確信している。官能小説家として一世を風靡した渡辺淳一は言っていた、「打たれ強い奴こそが成功を手に入れる」。最近に私が好む言葉のひとつに「出藍の誉れ」というものがある。“青は藍より出でて、藍より青し”と同義のこの言葉は、弟子が師を超越して功を成すことを指しているが、慈恵医大リハ科から育っていった彼らは、（当時は私の弟子であったと多少でも認めてくれているのであれば）まさに“出藍の誉れ”そのものである。私の全く知らぬところで彼らが着実に研究を進め、いつの間にやら優れた英語論文を私が憧れるような英文医学雑誌に発表しているのを見ると、私は感慨を覚える。

　ちなみに、私には“ゴルフの師”もいる。整形外科医である彼には、クラブの握り方からご教授をいただいた。今でも年に一度くらいはゴルフ・ラウンドをご一緒するが、いつも今一歩のところで私は彼に及ばない。そんな私に向かって彼は「お前もまだまだだな」みたいなことを言うので、私は「三尺下がって師の影を踏まず」と言ってやる。すると彼は嬉しそうにほくそ笑む。私は思う、弟子に勝ったことを喜ぶような師にだけは負けたくないものだ。そして、そのラウンドからの帰り道に、私は新しく発売されたドライバーの試打をしてしまう。

（終わり）